

Title	洋學論(高橋磧一著, 三笠書房發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.180- 182
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0180

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

後に「宗教社會學的研究の動向」の題下に、フランス國內の動きと共に、對外的な影響が看取されてゐる——著者が我國への影響を逸されたのは千慮の一失か——

第二篇、社會學的研究は「原始經濟に於ける呪術・宗教的要素」「宗教儀禮に於ける社會的拘束性」「宗教神話の社會學的考察——特に神話と祭儀との關連について——」「宗教的エクズタズの研究——特にその原初形態について——」「神祕主義の社會學」「未開社會に於けるオルダリの一形態」の六論文より成る。

吾々はこの書によつてフランス社會學派の宗教研究を系統的に鳥瞰、把握することが出来、更にその方法論を以てする研究の實例を見ることが出来る。その意味でこの上なく有難い書物であつて、著者の該博な學識には多大の敬意を拂ふものである。

尙ほ著者の「研究」が、専ら外人の蒐集になる資料にのみ頼ら

れてゐるのも如何かと思ふ。わが周圍民族の生々しい資料に據られた讀後の感想を忌憚なく記させて戴けば、「アンリ・ボアンカレと共に科學は方法にあると確信する」と明言される著者が、フランス社會學派以外の 方法論に極めて冷淡なことである。例へば「勿論、われらはドイツに於て、且またその影響に立つ外國の學徒の間に於ても、トレルチやマツクス・ウェーバーの所説が、斯學の典型と看做され勝であることを知らないではない。實證主義を排撃し神學的臭味の餘りに濃いトレルチの所論は暫く措くとして、ウェーバーは先づ優秀な經濟學者であるほどに宗教學的な蘊蓄を有したかは疑問である。又その宗教社會學的研究は特別に愛好した題目プロテスタンチズムと資本主義との關連についてみても把握の方法が實證的精神によつてゐるとは斷じえない」(三頁)とか、「アントロポスのカトリックの學者殊にキルヘルム・シユ

ミット師らの反デュルケイミスマは信仰的立場の相違に負ふところ多大である」(七八頁)等々。「われらはデュルケム宗教學說に対する、多方面からの攻撃と非難とをよく知つてゐる。しかし更によく知つてゐるのは、何人が如何なる立場にあつて如何なる批評をなしてゐるかと云ふことである」(七八頁)といふ批評の態度には何か派閥的な感情のみ先立つてゐる様に思ふ。若し眞にフランス學派の學說が「肯綮に當つてゐる」ものだとすれば、他派に對する學問的批判はいよいよその點を明確にするに相違ない。上の如き著者の行き方からは、誰か耽溺の危険なしと言ひ切ることが出來やう。この點著者の再考を切望したい。

洋學論 (高橋慎一著)

(中井信彦)

日本歴史全書の一冊(第二十卷)として、高橋慎一氏擔當の「洋學論」が出版された。これによつて、近來愈々盛んになつて来て

ゐる洋學の研究に對し、更に一文獻を加へることが出來たのは喜ばしい。

天文年間最初の西歐人渡來があつて以後、我が國が直接に西洋の諸文化と接觸し、やがてこれを移入するに至つたことは、我が近世文化史上における重大の一事がでなければならぬ。我が近代文化の基調が正にそこから發祥し、我が科學思想の歴史的基盤が正にそこに胚胎するといつても或は過言でないであらう。かくして、世は徳川鎖國の封建社會にありながら、なほよく識者等の育くむところとなつた之等西洋近代思想學術——洋學の發展は確かに同時代文化の一異彩でもあつた。

しかし本書にあつては、著者自らもはしがきのうちに斷つて居られる通り、特に之等洋學の内容について詳細を記すことはせず、そのことは参考文獻並びに同解説を掲げて手引とするに止められ本文にあつては寧ろ洋學の勃興、成長等の情況をば専ら社會史的考察のもとに敍述してゐる。即ち本書はこの異彩を異彩として取扱はんよりも、寧ろそれが遂に異彩として終らねばならなかつた事情について、飽くまで當時の封建社會を通じて説明するにつとめたものと云つてよからう。

全編は緒論と卷尾の参考書解説の他、本文が洋學の準備（二一八四頁）、洋學の發展（八五—九五頁）、洋學の勝利（一九七一二二〇頁）の三部に大別され、その各々は更に細かい章節に區分されるが、要するにこゝで一貫して強調されてゐる點は、洋學發展の上における社會環境の支配影響についてあると思はれるのである。

封建治下の悲惨な生活にあへぐ人民等がその中から次第に人間的生活の欲求、人間性解放への叫びをあげるに至つたとき「洋學の勃興そのものは正にこの……人間的生活の獲得の爲の鬪ひ」（四六頁）となつた。そしてその勃興のためには、一には内容こそ貧弱ながら早く拓かれた長崎の和蘭通詞を中心とする蘭學が道しるべとなり、一には當時の官學たりし朱子學の有してゐた「窮理」の精神が、何等かの形で西洋近代學術の實證主義的傾向を迎へる思想的な素地を提供し、かくして漸く成長をみんとした洋學も、しかしながら、當時の封建的思想統制の厳しい重壓の下で必然的に歪曲され、僅かに自然科學方面の或る部門が、實學として幕府の殖產政策、國防充實等の一助に利用されるに止まつて、精神科學方面は全く萎靡せざるを得なかつた。例へば當時の社會においては最も自由な立場にあつた筈の町人等によつて稱へられるに至つた洋學影響下の思想的言動さへが、惜むらくは遂に封建社會の寄生的存在といふ特殊な彼等の地位を突破し得ずして、不徹底にもたゞ封建社會の内部的不満を云々するだけに終つてしまつた。「そこに洋學が市民階級との結びつきを得ざる社會的土臺の免除の重要な影響を見出さねばならず」（一九五頁）、而して「それは明かに封建支配に對する洋學の屈服であり挫折でなければならぬ」といふのである。

して僅かにこの安全地帯に身をおきつゝ只管學問に没入することによつて當時の抑壓を最小限度に避け、沈黙の中にやがて次代の先覺としての活動のための準備にいそしむ人々の他に、かうした逃避的傾向とは別に、更に行きづまれる封建社會の缺陷を最も身近く感じねばならなかつた中・小藩々士の間に、この洋學によつてその矛盾を開せんと熱望する一群のインテリ階級の生じつゝあつたことが注目される(→八三頁)。

そこで著者は斷乎として言明する。「幕府の實學乃至殖產興業的な、更に幕末に於ける……國防乃至國內改革的な洋學攝取策をいくら數多く羅列した所で、……それらを以て洋學の歴史をあとづけようとするならばそれは洋學冒瀆の覺書に過ぎない」(一〇二〇頁)。しかも「かの迫り来る封建制の矛盾の増大に何らか解決を求めるとして幕府が採用した西洋學術を……「天下後世生民」の爲のものとして學問の軌道を誤らせなかつた」(一六二頁)ものこそは封建治下にあへぐ人民等の人間的生活の切實な欲求に他ならぬ。「正にこれらの方の上に立ち、これら進歩への道を誤らしめざらんが爲に、學問を進歩の爲のもの、人民大衆の最大の幸福の爲のものとしてこそかの洋學者の苦難の努力があり、かつ人民大衆の要望の中にあつたればこそ彼等は學問の道を誤らなかつたのであらう」(二一三頁)と。洋學の勝利への道もつまりそこに拓かれてゐたのである。洋學者等の先驅者としての苦難も、そして同時に歡喜も或はそこに極まれるといふべさか。

先驅者の道には勿論平坦を望むことは出來ない。彼等の踏むべき道は常に未踏の難嶮であり、旅は孤獨で淋しいに違ひない。徳

川時代の洋學者等がさうした難苦を敢然とのりこえて、人民大衆の福祉のために捧げつくした姿は我々にとつていつまでも尊く輝しいばかりでなく、永く若き人々の發奮と鞭撻に資すること尠くあるまい。

この意味からして、最も新進氣鋭の高橋氏がこの課題を得られたことは、如何にも適はしいことであるとおもふ。同氏はわれら同窓の先輩であり、篤學勤勉の青年學徒である。この新著の公刊を祝福するとともに益々今後の健闘を祈つてやまない。(總頁二二四頁圖版八)(會田倉吉)

哲學年表 (速水敬二編)

速水敬二氏によつてこゝに編纂刊行をみるに至つた「哲學年表」について、筆者はそれを最も異色に富んだ年表の一として特に紹介したいと思ふ。

まづ序文において編と自ら本書についてつぎのごとく語つてゐる。

「哲學者、思想家の傳記、主なる著作、彼等の時代に於ける文化の現状を一目瞭然たらしめ、以て思想史研究の一助ともなさんとするのが本書の意圖である」

或はまた

「この仕事に着手した當座は専ら哲學關係の年表を作成する豫定であつた、併し哲學が時代精神の表現であり、他の文化との交互關係なくしては成立しない所から、これら一聯の事情を現